(1)

3 平和!!

八月六日

峠 三吉

5

あの閃光が忘れえようか！
瞬時に街頭の三万は消え、
焦しつぶされた暗闇の底で
五万の悲鳴は絶え、

渦巻く黄色い煙がうすれると
ビルディングは裂け、橋は崩れ
満員電車はそのまゝ焦げ
溶けちゃい瓦礫と抜切れの堆積であったヒロシマ、

やがてぼろ切れのような皮膚を垂れた両手を胸に
くづれた脳漿を踏み
焼け焦げた布を腰にまとって
泣きながら群れ歩いた裸体の行列：

石地蔵のように散乱した練兵場の屍体、
つながれた犬へ這いより
折り重った河岸の群も
灼けつく日ざしの下で次第に屍体とかはり、

9P

2.)

9P

夕空をつく火光の中に
下敷きのまゝ生きていた母や弟の町のあたり
焼けうつり、

無畳敷の床の糞尿の上に
のがれ横たわる女学生らの
太鼓腹の、片眼つぶれの、半身あかむけの
丸坊主の、
誰かだれとも分らぬ一群の上に朝日かがやけば
すでに動くものもなく、
異臭のよどんだ中で
金ダライにとぶ蠅の羽音だけ、

三十万の全市をしめた
あの静寂が忘れえようか、
そのしづけさの中で
呵うちかつた事や子のしろい眼窩が
俺たちの心魂をたち割つて
込めたねがいを
忘れえようか！